

第 20 章 動き出せば、地元にも当事者がいると分かる

福島県・ダイバーシティこおりやま

阿部のり子さん



実施日：2019年6月9日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：ビッグアイ・市民交流プラザ（郡山市）

【プロフィール】

地方公務員。2017年に「ダイバーシティこおりやま」を立ち上げ、代表を務める。「ダイバーシティナイト in 郡山」や講演会、映画上映会などで幅広く活動。コミュニティFMでラジオパーソナリティも務める。「誰でもトイレ」設置提案で平成29年度郡山市職員フロンティア賞表彰提案部門受賞、「法務 de ランチ」の活動で第13回マニフェスト大賞優秀コミュニケーション賞受賞。2019年4月からは月刊誌で「誰もが自分らしく生きることができる街へ」と題して連載するなど執筆活動にも力を入れている。

1. ダイバーシティこおりやまの立ち上げ

◆出身と家族構成

福島県郡山市出身で、大学進学と同時に新潟に引っ越し、そこで4年間暮らしました。大学卒業後は新潟の隣の長岡に引っ越して、民間企業に2年ほど勤めていました。その後、25歳の時に母の入院などを契機に、郡山に戻り、以降はずっと郡山です。

いまは、夫と二人暮らしです。娘が一人いますが、この春から社会人になって、関東で同じく公務員として働いています。

◆ダイバーシティこおりやま

2017年の1月に「ダイバーシティこおりやま」という団体を立ち上げ、今や3年目になります。性的マイノリティの方の存在を、私が初めて意識したことをきっかけに活動を始めました。

ただ、セクシュアリティの問題だけではなく、例えば国籍であったり、宗教であったり、価値観とかライフスタイルとかそういったことでも、「標準」といわれるような部分に当てはまらない人たちが、ボーダーの外に出されてしまう、排除されてしまうような空気感をいつも感じていて。そこに違和感があったので、そういったものを含めて、みんながお互いを尊重し合える社会になったらいいな、という思いで活動しています。

◆性的マイノリティについての意識（2015 年）

性的マイノリティについて意識したのは、2015 年のことです。当時は、市役所の法務部門に配属されていました。大学での専攻が法学部だったこともあり、条例等の審査や訴訟事務、法務研修の企画などを担当していました。

あるきっかけで、性別によって割り当てられる服装、例えば「男性はネクタイ着用」とか、「男性は短髪」といったルールにはハッキリと書いていないけれども当たり前となっていること、それを当てはめられることで苦痛と感じる方の存在を知りました。生まれたときに割り当てられた性別は男性だけでも性自認は女性という方にとっては、そうした性別を象徴する服装を苦痛だと感じるわけですが、それを「男のくせに」とか、「男として採用されたくせに気持ち悪い」とか、嘲笑するような人がいて、私は、吐き気を催すような嫌悪感を覚えました。なんて人たちだろうと思ってしまっ……。

そして、その人たちを許せないという思いと同時に、自分自身も知識不足で、性同一性障害という言葉は知っていたんですけど、イメージとしては、はるな愛さんしか思い浮かばなくて、よく理解できなかったのです。笑顔でキラキラしていて、女性より女性らしく生きているという感じで、苦悩ということを全然想像していませんでした。本当に無知で恥ずかしいのですが。

そのギャップを埋めるために、自分でインターネットとかで情報を調べるうちに上川あやさんの『変えてゆく勇氣』（岩波新書）という本に出会いました。その本を読んだら、本人が死すら意識するような苦しい時代があるということを知って、自分がいかに性の多様性に無知で無関心であったかと思い知りました。そして、これは何とかしなきゃいけないと思いました。

私には娘が一人いるのですが、性の多様性の存在を知らず、フリルいっぱいのお洋服を着せて「可愛い！」と無邪気に喜んでいました。

うちの娘は、性自認に違和はなかったようですが、もし何らかの違和を抱えていたら、私は娘にすごくひどいことをしていたのかもしれないわけです。

だから、私のような無知な母親を作ってはいけないなという思いを強く抱き、性の多様性をきちんと知ってもらわなければいけないと思いました。

◆人権部門への異動を申し出る

当時の職場は全員男性で、私 1 人が女性で異質な存在であったことに加えて、とあることをきっかけに職場で浮いてしまうようになり、重要な情報を私にだけ教えてもらえない、情報の遮断とか、関係の遮断とかを受けるようになりました。

そうした周囲との関係もあり、当時の所属長には慰留していただいたのですが、人権部門への異動を申し出ました。

残業も年間 1,000 時間を超える環境で、家族との時間もとれないのに、同僚の男性たちは徒党を組んでいるように感じて、私にとっては良くない環境だと思ったのです。

そして、念願かなって、2016 年 4 月に人権部門に異動となりました。

◆人権部門での勤務（2016年4月～）

人権部門に異動して、さあ人権担当部署に異動ができた。「私は人権を担当したいです」と上司に希望を伝えたのですが、残念ながら人権担当ではなく、男女共同参画プランの策定や新規事業をミッションとして与えられました。

それでも、私のうえには課長と課長補佐、私が係長相当職で、係員2人という少人数の部署だったので、人権関係でセクシュアリティの問題を取り上げたいという話を担当とも日頃からしていました。そして、その年に開催したのが、教育関係者向けの前川さん（前川直哉：本インタビュー聞き手の一人、本冊子にインタビュー掲載）の講演会（2017年1月開催）です。

まだまだ公務組織は古い考え方のままで、性について「寝た子を起こすな」的な感じでしたから、まずは、専門職の方に分かってもらいましょうという趣旨でした。

実は、私自身も幼稚園から中学校までカトリックの学校だったので、性について語るという事は、いまだにちょっと心理的圧迫があるのですが、そうではない人でも、やっぱり市役所だと性というのは、語るものではないというふうを考える傾向がありました。性同一性障害については、捉え方も違う人もいるのですが、同性愛については、差別の対象になっているように感じますし、事業化には難色を示されることもありました。

また、当時、とある幹部職員の方から「(同性愛は) そんなの気持ち悪い。俺は認めない、嫌いだ」と、さらっと言われたことがあったり、上司からも「まだ対策を講じるべきではない。」などと言われてしまい、仕事では、自分がやりたいことはできないのかな…と思い始めていました。

けれど、私自身の経験を振り返ると、子育てする前にもっと早く知りたかったということがいっぱいあったので……。情報発信したいという思いが強く、その後も、めげずに様々な提案をしました。当事者本人にとっては、少なくともお母さんに理解があれば、つらさが軽減されるかなと思っていますので。

◆ふくしまダイバーシティ・ナイトに参加（2016年12月）

地方公共団体の予算というのは、翌年度何を実施するかというのを秋に考え、それを3月議会の審議にかけます。つまり念願叶って人権部門に異動したものの、その年（2016年）の10～11月ぐらいには、次年度も提案したことが予算化できず、ほぼほぼ実現できないというのが見えてしまったわけです。

それで、「さて、どうしよう。来年1年間は性の多様性について何もできないんだったら、何か自分でできることはないかな？」と思い始めるようになりました。

そこで、いろいろと情報を探していたら、たまたま「ふくしまダイバーシティナイト」（「ダイバーシティふくしま」が福島市内で定期的で開催するトークイベント。本冊子掲載の前川直哉のインタビュー参照）の存在を知りました。まずは行ってみようということで参加したのが、2016年の12月20日実施の第18回ふくしまダイバーシティナイト「グローバルizmと「分断」」でした。

初めて参加して「こういう気付きの場が郡山にあったらいいな」と思いました。ちょうど、

前川さんに翌年1月に講演に来ていただくことが決まっていたので、そのときに、「実は私、郡山市の職員なんです」と言って、前川さんと名刺交換させていただきました。そして、家に帰って、参加して感じたこと等を自分の中で整理しているときに、「こういう勉強会に、私1人で行っているだけでは何も変わらないな」と思いました。そして、郡山でこういう学びの場があったらいいのではないかと考えたのです。

それで、前川さんに「こういうのを郡山でもやりたいのです！」ってメールを送りました。私としては、「ダイバーシティふくしまの出張イベントとして郡山に来てください」というくらいのニュアンスだったのですが、「どうぞ、郡山でやってください」と返事が来ました（笑）。あれっ？と思いつつも「あっ、そっか。自分でやればいいんだ！」とすぐに思いました。「協力は全面的にしますよ」と言っていたので、早速やってみようということで、すぐに日程調整をメールでさせていただき、「ダイバーシティこおりやま」を立ち上げて、前川さんを講師としてお招きしてのキックオフイベント「ダイバーシティナイト in 郡山」を開催しました。何と開催日は、決意からわずか1か月後の、1月31日なのです。

「ダイバーシティナイトをやるけど、そもそもダイバーシティって何？」っていうのがおおよその反応かなということで、まずは前川さんに「ダイバーシティとは何か」について話していただくことにしました。

◆第1回ダイバーシティナイト in 郡山（2017年1月）の準備

準備期間が1ヶ月しかない中でしたが、まずは会場を探しました。当時のふくしまダイバーシティナイトが、福島市のRe-Acousticというバーで開催されていて、ちょっと雰囲気がいいんですよ。公共施設の会議室とかだと堅苦しくなるけど、バーでライトも落ちた感じで、ドリンクを飲みながらという雰囲気が、すごくいいなと思って、それを再現できる会場を探しました。

地元でco-ba koriyamaというコワーキングスペースがあって、その雰囲気が良くて、その責任者の方が、もともと私が理事をしている「こおりやま女性ネットワーク＊Hanaの会」という団体でつながりのある三部香奈さんという女性でした。そこで「何人集まるか正直全く分からず会場費負担が厳しいけれど、個人の社会貢献活動として開催したい」とご相談したら、「趣旨に賛同できる内容だから、会場費は安くするので使ってください」と言ってくださって、大きな負担にならない金額で貸していただけることになりました。以前、アフリカの子どもたちに月々5,000円送るというプロジェクトに賛同していたことがあったのですが、この活動も同様に、無理のない範囲で自分のお小遣いでできる社会貢献とすることができました。

また、なるべく雰囲気を再現できるよう、「語り合える夜カフェ」みたいな感じをコンセプトにしようと考えて、カフェメニューを準備しました。

さらには、初回だったので、「まずは開催することを広く知ってもらわなきゃいけない」ということで、郡山のリビング新聞の編集長の鈴木朱美さんがお友達なので、お願いして告知の記事を書いていただきました。市内全戸配布のフリーペーパーなので、学生さんから年配の方まで幅広い世代が読んでいる地元では誰もが知っている媒体で、実際に記事を見た

という方の参加もありました。朱美さんは、初回以降も開催の都度、告知に力を貸してくださるほか、ダイバーシティナイトや講演会などのイベントにも何度も参加してくれていて、お友達の存在はととても有難いなと思います。

また、せっくなので、団体のロゴマークを考えて、チラシも手作りしました。先ほどお話ししたとおり、前川さんがちょうど、1月20日ぐらいに郡山市で講演をしてくれることになっていたのので、そこでもチラシを配布して頂きました。私は仕事とプライベートを切り分けなきゃいけない立場なので、その場で配布することは到底できないのですが、前川さんが「自分のイベントの紹介」としてチラシ配布を申し出てくれました。

その時まで、職場ではこういうイベントをやるというのも言い出すこともできずにいたので、前川さんが、講演の場で「ふくしまダイバーシティナイト」と「ダイバーシティナイト in 郡山」の両方を宣伝したいという趣旨のメールが担当者に届いて初めて「あれっ、郡山でもやるんだ。誰がやるの？」みたいな感じになりました。

◆立ち上げメンバー

やると決意したときは、私1人だったので、自分で受付をやって、飲み物を作って、司会をして、というのは厳しいなと思い、趣旨を理解したうえで手伝ってくれる人を探しました。最初に心に浮かんだのは、池田さんという助産師さんです。その方は、思春期の高校生たちのピアカウンセリングをする団体でボランティアしている方で、二つ返事で早く手伝って下さいました。「ダイバーシティこおりやま」の立ち上げメンバーの1人です。

彼女とは上野千鶴子さんの講演会を開催したときに知り合い、その後、仕事でも関わりができて、ダイバーシティナイトをやろうと動き出した時に「私、実はこういうこと始めることにして」と言ったら、「実はピアカウンセリングの中でも、セクシュアリティの問題って結構出てくるんです」という話をさせていただいて。「じゃあよかったら一緒に活動してくれませんか？」とお誘いしました。当時、まだ彼女は主婦だったので、自由に動けるというのもあってレインボーリボンを作ってくれたり、ウェブサイトを立て上げて管理してくれたり、とても心強い存在となっています。

◆初イベントに40人が参加

教育関係者向けの前川さんの講演に来てくださった方、リビング新聞の記事を見ていらした方、あと前川さんもお知り合いにいっぱい声を掛けてくださって。結果、初回の「ダイバーシティナイト in 郡山」には、40人ぐらいの方が集まって下さいました。

様々なイベントを経験している池田さんには、開催前に「5人来たら成功だと思ってね」と言われていました。だから、大勢の方が来てくださってドタバタでしたが、本当にうれしい悲鳴という感じでした。

初回だったので、私自身も友達とか知り合いにもラインやメールで「是非、来て来て！」と宣伝したのですが、まさかこんなに来てくださるとは！と感動しました。

でもそのときは、活動を続けていくなんていう覚悟はしていなかったのです。これまた前川さんがキーマンになっていて、ご本人は覚えてないかもしれないんですけど（笑）。

イベントの当日、すごい良い雰囲気のあたたかい場になって、皆さんも素敵な笑顔になってくださいました。何とリビング新聞の記事を見て、高校生が参加してくれたり、友人が小学生のお子さんを連れて参加してくれたり、幅広い参加者をお迎えすることができました。

会の結びに、「今日をご参加いただき、ありがとうございます」とご挨拶をしたときに、「最後に前川さんから何かありますか?」と言ったら、前川さんが、「皆さん、こういう場がまた郡山にあったらいいですよ」って言って、参加者の皆さんが、ぱ〜っと大きな拍手をしてくれました。そして前川さんに「どうですか、のり子さん。またやりませんか? 続けてくれませんか?」と言われて、もう断れない感じというか(笑)、大成功に気持ちもテンションも上がっているし、じゃあ頑張ってみます、とその場で継続を決意しました。「きっと毎月は無理だろうし、2カ月に1回でどうですか?」って言われたのですが、それもちょっと負担になってしまうかなと思って、3カ月に1回という選択をそのときにしました。

2. 活動の継続と広がり

◆第2回のイベント開催(2017年4月)

1回目は本当に2回目というのを考えていなかったの、2回目からどうしようかというのは、その後考えました。

ちょっと話が前後してしましますが、初回を開催するとき、夜7時からのため、「仕事からまっすぐ行くね」と声を掛けてくれていた友達も何名かいたので、「せっかく来てくださるのに、お腹が空く時間かな」と考えて、何か食べるものをご用意したいと思いました。

そして、郡山市内のあさかホスピタルという、精神科の病院を運営している医療法人の理事長・院長である佐久間啓先生に「何か力になれることがあったら言ってね」って言われていたのをふと思い出して、連絡してみることにしたのです。

啓先生は、精神疾患や精神障害を持った方々を施設に閉じ込めるのではなくて、地域で共生できるような仕組みを作りたいと、牧場やパン屋さんなど就労できる場を作って、その商品を提供するというをやっておられます。それで、そのパンが、私が目指すものにすごく近いなと思ったので、「よかったらこのイベントに先生のところで作ったパンを提供してください」ってお願いしてみました。

秘書の方に電話したら、ご本人は不在でしたが、秘書の方が連絡を取ってくださって、「パンを提供します」と言ってくださいました。最初は10個あれば間に合うかなと思ったのですが、1人2個配れたらいいなと思って一応20個お願いしますって言って。そうしたらどんどん申し込みが増えていって。再度、お願いして増やしていただきました。当日、お店の方からも「好きなものを好きなだけ持って行ってもらってくださいと言われていました」と言ってくださって、第1回の時に参加者全員にパンを一つずつ提供ができたという経緯がありました。

啓先生は大きな医療法人の理事長さんで、お忙しい方なので、パンをいただきに行ったと

きに「今日はパンをありがとうございました。本来であれば伺って御礼のご挨拶をしたいところですが、お忙しい先生なのでお手紙だけで失礼します」という趣旨を一筆箋にしたためお店の方に渡したら、後日、秘書の方から「佐久間が会いたいと申しております」と連絡をいただきました。たまたま、バレンタインデーを指定されたので、これはチョコレート持ってこいということかなと思ひまして（笑）、お礼を兼ねて高級チョコレートを持参しました。それで、チョコレートをお渡ししながら、「次回のダイバーシティナイト in 郡山の講師を啓先生やっていただけませんか？」とお願いしてみたのです。

すんなりお引受けくださって、2 回目のテーマは精神疾患や精神障害、発達障害など見えない障害とか見えない疾患に対する差別もやっぱり問題として大きいと思うので、テーマにとりあげ、4 月に 2 回目を開催しました。

一応私は快諾だと思っていたので、当日私は司会として「啓先生、今日のご快諾ありがとうございました。今日はこういう趣旨で……」と話してマイクをお渡ししたら、啓先生が開口一番、「今、阿部のりさんは快諾って言ったけど、僕は断る権利がなかっただけなんですよ」と言われました（笑）。「あっ、そうだったんですね」と会場はあっという間に笑いに溢れました。

啓先生とは、医療介護病院という病院を作るプロジェクトで 8 年間ご一緒したことで、繋がりをいただいたのですが、啓先生が拒否権がないとおっしゃるから、先日、映画の上映会の協賛依頼をしたら拒否されたので、拒否権あるじゃないかと思ったんですけど（笑）。

イベント当日、啓先生はすごく楽しそうにお話してくださいました。質疑もたくさん出て、予定時間をオーバーするほど、大盛況でした。啓先生は、その頃は市内でスピーカーとかをやっていたので、啓先生に会いたい、お話を聞きたいという福祉関係者の方もいっぱい集まってくださったので、お陰様で第 2 回の参加者は 56 名となりました。

◆イベントを機にメンバーが増える

当時はまだ謝礼を出せなかったので、「その日メンバーと打ち上げをやるので、先生いらっしゃるようでしたらご招待します」と言ったら、先生が「じゃあ行くよ」と言ってくださいました。これがまた、郡山のメンバーが増えるきっかけになりました。

本当に 1 人で立ち上げて、当日のお手伝いを頼んだお友達が 1 人。それから一緒に活動してもらえないかなとお誘いした人が 2 人で、初回はメンバー 4 名で開催したのですが、お客さんはいっぱいいるから、もう間に合わなくてバタバタしているんですよ。すると、お客さんで来た人が、私たちを見かねて、飲み物を作ってくれたり、一緒に受け付けしてくれたり自然とお手伝いしてくれる人が出てきたのです。

それで、初回終了後、お手伝いしたいというお申出をいただき、2 回目にはメンバーが 6 人ぐらいになっていました。そこで、メンバーの人に「打ち上げやりませんか？啓先生も来てくれるっていうからどうかしら？」と声を掛けたら、あっという間にメンバーが増えて、打ち上げのときには 8 人か 9 人ぐらいに増えていました。

◆ウェブサイトでの発信

「ダイバーシティこおりやま」という名前を付けて、グループという体裁を整えたのは、1 回目を開催するときです。前川さんとのメールで、「前川さんがやってくれるんじゃないですか」「いや僕はやらないので、のり子さんがやってください」というやりとりがあって、「のり子さんが自分の名前でやってもいいし、団体を立ち上げてもいいし、どうですか」って前川さんに言っていたら、阿部のり子プレゼンツといっても誰も意味が分からないので、「ダイバーシティこおりやま」という団体にしました。

ウェブサイトができたのは、1 回目の開催が終わってからですね。

1 回目のイベントが終わったとき、私もですが、先ほどお話した助産師の池田さんも、1 回目があんなに盛り上がることで想定していなかったのです。イベントの後、「せっかくあれだけ盛り上がったのだったら情報発信したほうがいい」と池田さんがウェブサイトを作ってくれました。彼女のノウハウを、ダイバーシティこおりやまに還元してくださったので、とても助かりました。

ロゴマークは、1 回目のチラシを作るとき、何か欲しいなと思って考えたのですが、word で丸いマークと星を作って、色の配置を決めて、作りました。

レインボーフラッグだと、色の境目がくっきりしていますが、私はそれだとまた、黄色とオレンジの境目とかが気になってしまうので、全部グラデーションにして、境界を作らず、みんなそれぞれが区分されないイメージにしました。

多様性の尊重には、働き方の多様性、存在の多様性、価値観の多様性の 3 つの要素があるといわれているので、その 3 つを星で表して、ロゴマークにしました。

このロゴマークが、ウェブサイトや名刺など、様々な方の力を借りて、素敵なデザインに広がっています……。だから本当に、皆さんに助けられて、あつという間にぼんぼんぼんと活動がうまくいったという感じです。

団体の活動目的やミッションは、初回を開催するときには作っていません。初回のときに、1 回しか想定はしていなかったけど、1 回の思い出をちゃんと次につなげてもらいたいという気持ちは強かったので、レインボーのリボンを作ったんですね。で、それを 1 個 100 円で買っていただく形を取ったんです。無料でもらうと、私もそうなんですけど、ポイントどこかにやっちゃうので。だから、ちゃんとお金を出して受け取ってくれる人は、多分大事に使ってくれるかなということで、そのリボンを準備しました。池田さんと 2 人で手作業で作りました。そのときに「やっぱりリボンにつけるメッセージが必要かな」と思って、「価値観やライフスタイルは人それぞれ。空気を読んで、自分を隠して生きるなんて、ハッピーじゃないハズ」というメッセージを書きました。そのメッセージは、そのまま池田さんがウェブサイトのホームのところに載せてくれて、それが今でも続いています。

◆活動とメンバー

その後も「ダイバーシティナイト in 郡山」は何とか 3 カ月に 1 度というペースを守り、続けています。メンバーも 15 人ほどになりました。性的マイノリティ当事者のメンバーも増えてきています。ただ、やっぱりメンタル的な問題を抱えている人も多くて、連絡がつか

なくなる人や、休眠状態の人もいるので、実質稼働している人は 8 人ぐらいかな。あとは、外国籍のメンバーもいます。

メンバーでは、情報共有のために、全員が見られるグループラインを作っていて、そこで企画なども話し合うのですが、積極的に企画を出してくれるというよりは、私の企画に皆さんが協力してくれるという感じです。最初の頃は、企画することが楽しいから、皆さんにも考えてほしいなと思って呼び掛けたのですが全然反応がなくて(笑)、「なんで企画をだしてくれないんだろう？」って思ったのですが、私は企画が好きで、気が付いたら動いているタイプなのですが、そういうことが楽しいというより苦になるタイプの人もいるのですよね。だから、参加のスタンスも人それぞれで良いと思っています。各自のスタンスで、私が考えたものに「もっとこうしたらいいんじゃない？」っていう意見を出してくれたり、応援してくれるので、とても助かっています。

例えば今、次のイベントを、性的マイノリティの当事者&家族限定ナイトにしたいと思っているのですが、ウェブサイトを立て上げてから、メールでいろんな方からコンタクトをいただくようになって、当事者の方々から「郡山で、当事者が集まれるところに行きたい」とお声があります。ツイッターで告知している「郡山にじいろサークル」(本冊子にインタビュー掲載)という団体さんがあるのですが、どうやら若い人が主体みたいなので、ちょっとそこに入りにくいとか、「ツイッターは見たことありません」という人も多いので、やってみようかなと考えているところなのです。

そうするとメンバーのみんなが、「イベントを夜にすると、出かける理由を家族に知られるのが怖くて、参加できない当事者もいる」とか「日曜日の昼間とか、ちょっと行ってくると言っても不自然じゃない日がいいと思う」なんて意見を出してくれたりするので、それで開催日を決めたりするという感じです。

◆ダイバーシティ講演会 (2018 年 1 月)

立ち上げから 1 周年の 2018 年 1 月 20 日に「ダイバーシティ講演会&レインボーフェスタ」を開催しました。ビッグアイ(郡山駅ビル)の 2 フロアを使って、講演会には、私が性的マイノリティ当事者の苦悩を知るきっかけとなった上川あやさんをお招きしました。「うつくしま基金」という助成金のスタートアップ事業という、福島県内の団体が活動を始めて 1 年以内だったら、最大 30 万円まで助成を受けられるという制度あり、その助成金を使って開催しました。

というのも、ダイバーシティナイトを 2 回、3 回とやって気が付いたのは、興味ある人しか来てくれないんです。でも私が問題にしなきゃいけないのは、興味のない人。私も多分、そういう勉強会があっても行かなかったタイプだと思うので、「興味のない人に知ってもらうツールを私がやらないと、変わらないな」と思いました。

それで、団体立ち上げの半年後、2017 年の 7 月から無料の出前講座を始めました。企業さんとか団体さんとか、どこでも呼んでくれれば行きますよということで、ちょっと市外の場合は交通費だけくださいとか、本当に自分のお小遣いだけでやっているの、資料印刷したいときは印刷代だけくださいということで始めました。

今思うと無鉄砲かもしれないと思うのですが、その前の年の 10 月に人権担当者を育成する、法務省の指導者養成研修というのを受けて、一応認定を受けていますので、人権関係について教える一種の資格は持っているので、やってみようと思いました。

でも、ただ「講師やります」と言うだけでは誰も呼んでくれませんよね。そこで、地元の医師会長でもある土屋繁之先生に、ダイバーシティこおりやまのサポーターになって頂いていたので、「実は無料の出前講座を始めたので、職員研修などあれば、お声掛けてください」とメールをしたら、「ちょうど予定があるから」とすぐに呼んでいただくことができました。今年の秋には、土屋先生が理事長をなさっている医療法人慈繁会さんのお祭りにダイバーシティこおりやまも参加させていただく予定もあり、土屋先生には、いつも、私の活動を温かく見守っていただき、とても感謝しています。

病院という性格上、スタッフが一堂に会する時間を確保するのは難しく、時間は 30 分しかないということで、時間内で終わるようにまとめたものを作りました。研修をやることになったという話をしたら、新聞記者の三浦美紀さんが性の多様性に関心があるということで取材に来てくれました。そして、その研修を地元紙『福島民報』に写真付きの記事にしてくださいました。

すると、記事を見た当事者のお母さんが、その記事を頼りに私にたどり着いてくれたのです。ウェブサイトなどはご存知なくて、あちこちに電話して、私を探し出して下さったのです。

仕事にお電話をいただいて、お昼休みに携帯から掛け直しますねとお伝えして、お昼休みに電話をしたら、本当にせきを切ったようにご自身とお子さんのことを話されました。お子さんが当事者で、男性として生まれて性自認が女性のようにだけけれど、中学校くらいから、想定外の行動が多かったと。お母さんはそれを受け入れられないまま、お子さんは引きこもりになってしまい、今 30 代だということでした。

そして、自分たちが働いているころはよかったけど、これから年金生活でもう子どもを支えられなくなるという不安を抱いていたところに、私が載った新聞記事を見て、この人と繋がりたいと思ってくださったそうです。

やはり、私が当初感じていた、「お母さんが知らないで、親も子も傷付けてしまう」ということをさらに実感した出来事でした。そして、もっともっと広く知ってもらわないといけないと感じ、大きい花火を打ち上げなきゃ誰も見てくれない！ということで開催したのが「ダイバーシティ講演会」なんです。

お電話くださった方は郡山の方で、「やっぱり地元にも苦しんでいる当事者さんがいるんだ」と再認識するきっかけにもなりました。活動を始めたころとか、職場で性的マイノリティに関する提案をしても「郡山にはそんな人いないよ」とか「それは東京の話でしょう」みたいなことを言われましたが、私も実際にお会いしているわけではないので言い返すこともできませんでした。でも、動き始めれば郡山にもいるということが実感できます。だから、知らずに当事者を傷つけてしまう親を作らないために、「性って多様なんだよ」と知ってもらう機会をつくらなくちゃいけないと感じたのです。

どうやったら大きい花火を打ち上げることができるだろうかと考えました。関心があま

りない方でも、なんだろう？と思ってもらえるような仕掛けが必要だと思いました。

そこで「ダイバーシティこおりやま」の 1 周年記念事業として、ビッグアイの 7 階大会議室で上川あやさんの講演会、6 階のギャラリーでレインボーフェスタというのを同時開催することにしました。スタートアップの助成金を活用することができたので、謝礼金や会場費、告知のためのポスターやチラシの印刷代、来場者に配布するレインボーカラーのグッズ作成費用などを確保することができました。いろんな方にポスター掲示もお願いしたり、地元紙でも告知していただいたお陰で、講演会には 154 名、レインボーフェスタにはおよそ 400 名の方が参加してくれました。

このお話を東北弁護士会の講演会の活動報告でお話したら、知り合いの弁護士の先生に、「活動開始から 1 年でここまでやるとは、暴走機関車みたいだ」って言われました（笑）。

◆レインボーフェスタ（2018 年 1 月）

講演会と同時開催したレインボーフェスタというのは、様々な活動をしておられる団体さんに、自由にブースを出してもらったイベントです。というのも、市民活動を始めると、いろんな他の市民活動をやっている方と関わるのですが、障害児教育をやっている人は、障害児に関しては「何でもみな障害児を差別するんだろう」と言うのに、同じ人が「最近外国人が増えて治安が悪くなったわよね」とおっしゃる。皆さん、自分の領域は熱心に活動されているのですが、ほかの人権には無頓着な面があって、私はそこにすごく違和感がありました。ダイバーシティこおりやまは、そういうのを全部混ぜこぜにしたいと思っているのに、それぞれの団体さんはボーダーを持って動いているみたいに感じていたのです。だから、いろんな団体さんに、お互いの活動を知ってもらう場を作ったら知るきっかけにもなるんじゃないかなと思いました。

一般的に、イベントでは、参加団体は参加料を払って、ブースを出店して、パンを販売したりするわけですが、レインボーフェスタは助成金をもらうので、ブース料なしで、「みんな好きなだけ販売して、売り上げのバックマージンもいらないので、収益あげて活動費にあててください」という場にしたら、十以上の団体に参加してくださいました。性の多様性に限らず、障害者福祉や CAP、音楽やスポーツの同好会などさまざまな団体の参加や、福島市の「よりみち」さんや白河市の福祉団体さんも来てくださいました。

私は福祉関係団体とはつながりがなかったので、もうアユのやな場のように、間口を広げて待っているだけでした（笑）。場を作って、「無料でブース出せるからどうですか」という感じです。福祉団体の方は販売できる場があって、ある程度の時間が確保できるんだったら来てくれるっていうのが、レインボーフェスタで分かったことですね。皆さんやっぱり苦労されているのです。何かイベントにブースで参画すると 5,000 円の参加費を払って、さらに売り上げのマージンも取られてしまったりする。そうすると、売り上げてほとんどお金にならないですよ。

福祉の団体も、無償ボランティアではやっぱり生きていけないわけで、皆さんが自立していけるような仕組みを応援するのが本来だと思うのですが、なかなか、道のりは遠いかもしれません。

後から考えてみると反省点もいっぱいありますが、ただ、まずはやってみて、やらない後悔よりはやった後悔のほうがいいかなと思っています。

レインボーフェスタでは、例えば知的障害という分野だけで活動している団体や、精神障害についての団体、音楽の同好会とか、女性支援団体やシングルマザーの団体とか、それぞれがその場で横のつながりを作ってくれたという話は聞いているので、一つの目的は達成できたかなと思っています。

ただ、やはり、ボーダーを作ってしまう自己本位だったりすると、関係ってうまくいかないものですよ。同じ形で2回目の開催というのにはできないなというのが、1回やってみての感想です。もう少し、参加の段階で、きちんとイベントの趣旨に賛同して、全体を見て動いてくださる方という最低限の条件をつけないと、自分の団体は完売したので、撤収して帰ります……ということもあり、当然、全体の片付けなどの負担は残った方にだけかかってしまいますので、多様な方と組む難しさは実感しました。

3. 職場と活動について

◆活動と仕事の関係

当時、職場は人権部門にいたのですが、「仕事にも活かせることだから、活動を応援するよ」というような雰囲気は全くなくて、理不尽な目にも合いました。「仕事中に仕事以外のことをやっているのではないか」と疑いをかけられたことがあり、その後、席は上司の目の前に座らされ、1年間ずっとPCの画面を監視されているように感じていました。

自慢になってしまうのですが、私、すごく仕事が早いのですよ（笑）。今の職場でも周囲の職員から人の2~3倍の速さで生きていると言われるほどです。だから、団体の活動もパツパツパツって集中して取り組むと、お昼休みとか、夜自宅に帰ってからの時間で、サラッとやれてしまうのです。けれど、それをできない方から見れば「こんなに活動してるんだから、きっと仕事中に隠れてやっているに違いない」という疑いにつながったのかもしれないなど今となっては思っています。

◆職場でのパワハラ

職場では、真綿で首を絞められるような息苦しさが続いていました。例えばよく遅刻する職員がいたのですが、その職員は遅刻しても5分までは休暇を付けなくていいのに、私は来客があっただけで仕事に公私混同ということで、5分でも休暇を付けなければなりません。なまじ知り合いが多いので、市役所来たついでに私の席に寄ってくれる方々がいるのですが、その都度、休暇申請という具合でした。確かに、仕事していない時間だから仕方ないのですが。だから当時は私も、「来てくれるのは嬉しいけれど、しばらくは来ないほしい」という感じになってしまいました。

他にもお昼休みにパソコンを使用して法務を学んでいることが、業務外閲覧にあたりと注意されるなど、それまで経験したことのないような指導を受けました。さらには、会議資料の時間の誤記があったときには、課全員がチェックしているはずなのに、職員全員の前で

謝罪を強要されたこともありました。こうして、私もとうとう突然めまいに襲われるようになってしまいました。当初は更年期かな、それとも何だろうなという感じだったのですが、様々な検査を受けても異常がなくて。最終的に、ストレスが原因だと分かりました。そのときに、「ああ、もう私の身体は限界にきているのだな」と思い、パワーハラスメントの申立をしました。当時は、法制化もされていなかったもので、任意の仕組みです。

担当部署が任命した相談員は、パワハラ認定ではなく、関係調整という形に入りました。関係調整のときに、「本人に謝罪をさせることができますけど、どうしますか」と言われたのですが、当時はそんな状況になっても、私はまだ人権部門にいたかったので、関係調整できるなら、私はこの課で来年こそ人権の仕事をしたいとの思いから、謝罪は求めませんでした。一応、相手の方とも直接お話をして、「申立をした私のことを異動させたいでしょうか？」と聞いたら「そんなことはない」と言っていたので、謝罪を求めなかったのですが、結果的にはその年に他部署に異動となり、異動させないというのもウソだったと最後に言われ、関係が修復されることはありませんでした。

多分この心の傷は忘れられないのだろうなと思っています。実際、今でもパワハラの記事を読むと、自分とは関係ないのに、当時のことがフラッシュバックすることがあります。

けれど、この経験で、辛いときこそ、口に出せないという弱い立場にある方々の気持ちを芯から理解できるようになったのだと思っています。

そして、申立をしたことで、様々な経験もできたのでよかったと思います。

活動や仕事をしていて思うのですが、本当に力がある人とか、立場が安定している方でないと、頑張っている年下の人間を受け入れられない、応援できないのかなと思うことがあります。だから、サポーターになってくださる方が良い例ですが、応援してくださる方は、やはり飛びぬけた力のある器の大きい方ばかりなのだと思います。

ダイバーシティこおりやまの活動をしていると、先ほどのように新聞で取り上げられることもあります。福島民報さんのウーマンズアイというコーナーで大きく取り上げられたこともありました。すると、応援してくれる人もいる半面、苦々しく思う人もいるかもしれません。「出る杭は打たれる」とはその通りだなと思うことはしばしばあります。

◆ラジオ出演（2018年9月）

私自身、色々なことがあって、活動を少しセーブしようかと葛藤しました。結局、出れば出るほど、打たれるわけですから……。

徴収という自分が考えてもいない部署に異動になって、若干失意もありました。でも、辞めずに働いていればお給料もいただけるし、仕事は自己実現の手段じゃなくて、生活していく手段だと思えばいいじゃないかというふうに自分で思えるようになっていきましたが、このまま活動していたら、また嫌な目に合うのかなと思うと、とても悩みました。

でも、そんなときに、ラジオの生放送に出る機会がありました。

去年11月に、私が主宰している自主勉強会「法務 de ランチ」と、「ダイバーシティこおりやま」とのコラボ企画として「まちづくりについて考えるイベント」を開催した際、市民の方にも広く参加していただきたくて周知をしてほしいと地元のラジオ局にメールでお願

いしたことがきっかけです。

ココラジ郡山というコミュニティ放送局があるのですが、そこの小林恵さんというパーソナリティの方が1月のダイバーシティ講演会に来てくださって、名刺交換していたので、コラボ企画の件でご連絡をしたら、「生放送番組があるからゲストとして案内しませんか」と誘っていただきました。ラジオは顔も見えないしいいかなと思って、出演することにしました。実際に伺ったら、1月のシンポジウムで、私がコーディネーターとして話していたのを恵さんはご覧になっていたので、「この人なら何とかしゃべれるだろう」と思ってくださったのかなと思うのですが、なんと2時間生放送の番組に出ずっぱりという無謀な挑戦でした(笑)。

そこで「ダイバーシティって何」とか「性の多様性って何」というお話をさせていただいたら、その後ダイバーシティこおりやま宛てに、1通のメールが届いたのです。「ダイバーシティこおりやまという団体ができたということは知っていました。ウェブサイトでも阿部のり子さんの写真も見ていました。そして、ラジオを聞いて、顔と声が一致したことで、自分が生きていてもいいと思えるようになりました」ということが綴られていました。

ああ、そうなんだと思って……(しばらく言葉に詰まり、涙を拭く)。

……私の声と名前が一致するだけで、生きていてもいいって思える人がいるんだったら、これからも出なくちゃ！って思ったのです。出たくないとか、打たれたくないと思っただけは駄目だなんて……、そして「打たれても打たれても、出る杭になろう！」と決意しました。

◆月1回のレギュラー番組「郡山PRIDE」(2018年10月～)

そんなことがあって、ラジオに出てよかったなと心から思っていたら、たまたまココラジ郡山にも反響があったのか、パーソナリティの小林恵さんから、「月に1回、ラジオ番組を担当しませんか」と声をかけていただきました。

先ほどのメールも頂いていたので、「ああそうか、お家に引きこもっている人にとっては、いくら私が勉強会やっても講演会やっても出て来られないけど、ラジオだったら声が届くんだ」と気付きました。ですから、ラジオ番組もやってみよう、やります、やらせてください！って伝えて、その年(2018年)の10月からラジオ番組のパーソナリティ&コメンテーターをすることとなりました。9月に生放送に出て、10月の第4金曜日からです。

10月から始まった番組は「こおりやまPRIDE」という番組で、これは生放送ではなく収録です(現在も毎月第4金曜日 20:00~20:58に放送中)。基本的にはあらゆる多様性、ダイバーシティについて情報提供する番組なのですが、やはり性の多様性を取り上げることが多いです。恵さんと2人で相談しながら、毎月テーマを決めています。

最初の3回ぐらいは2人でやっていましたが、ゲストを呼んでみたいという話になって、1人目のゲストは、ダイバーシティこおりやまのきっかけでもある前川さんに出演していただきました。その後も様々なゲストの方に出ています。

私、自分のルックスがそんなに好きじゃないので、フェイスブックとかの写真は全部シルエットにしていたのですが、ラジオのパーソナリティ紹介はシルエットはNGと言われて、仕方なく、地元の写真館さんに行って「詐欺にならない範囲で修正してください」とお願い

して写真を撮っていただきました。顔と声が一致するよう皆さんに知ってもらって、また 1 人でも「ああ生きていてもいいんだ」と思えたというような人が増えるのならいいかなと思っています。

私も活動を始めたときは、最初のお 1 人のことしか分からなかったけれど、活動を通していろんな方とつながりができてきていて、皆さんが一様に、ありがとうございますとくださるのです。だから、これから、続けていきたいなと思っています。

たまに「目立ちたいだけでしょ」と言われたりすることがあるんですけど、目立つと叩かれるし、いいことないですって本当に思います（笑）。

でも、私が目立つことで救われる人がいるなら、叩かれる痛みくらいなら平気だなと最近思うようになりました。ですから、何か、講演や出演などのお話をいただいたら、私は何でも受けていこうと自分で決めています。

4. 活動と地域性

◆地元で活動すること

地元の郡山市で活動することに関しては、私は当事者ではないので、あまり抵抗はないのです。やはり当事者の方だと、自分のセクシュアリティを明らかにして地元で活動するというのは、アウティングなどのリスクがあって難しいと思うのですが、私自身はそういう心配がないので。むしろ自分の知り合いや友人関係を通して、協力してくださる方がいたり、今まで仕事でつながってきた方が応援してくださったりするので、私にとっては、地元という点は非常にメリットになっていると思っています。

◆顔出しで活動できる人が少ない

東京のイベントだと、顔を出しして活動している方、アクティヴィストといわれる方とかが沢山いますが、なかなか福島にはいらっしやらないです。勇気を出して活動を始めても、それが原因でメンタル不全になってしまう方もいらして、当事者の方が地元で生きることが、いかに辛いのかと感じています。

活動では、ボランティアとして予定している人が、実際には全然集まらなかったという話を聞いたことがあります。東京だと、元的人数が多いから何とかあるんですけど、郡山でそうになってしまうと……。ダイバーシティこおりやまも、本当にイベントをやる当日にドタキャンということもあるので、毎回、最終的に何人来てくれるか分からないというリスクを負いながらやっています。キャパが小さいので、この活動を継続していくために、志や想いを共有できる人を増やしていけるのかというのが課題です。

一番の同志である、ピアカウンセリングの助産師さんが、転勤の関係で県外に引っ越してしまったので、ウェブサイトは今でも管理してくれているのですが、転勤とかに左右されてしまうといった地方ならではの課題はありますね。

最近増えているのは、郡山に住んでいないけど、ダイバーシティこおりやまの活動に興味を持って来てくれている人です。白河とか、二本松とか、会津から来ましたとか、郡山の地

の利の良さから、福島県の中での役割も少しは担えるようになってきたのかなと思っています。

東京でも、全ての区でそういう活動があるわけではないけれど、移動できる範囲に 1 つ拠点があれば、地域の中での課題解決ということができるのではないかと思います。

ダイバーシティこおりやまでは、身近な居場所作りはできないので、居場所が欲しいという人には「ふくしまコミュニティスペースよりみち」を案内しています。

移動可能な範囲の中で、他の団体と連携できる場を作り出したいなど、今思っているところです。

性的マイノリティ当事者の方にとっては、本当の地元ではないほうが行きやすいこともあるのかもしれませんが。郡山に住んでいてダイバーシティこおりやまに行くより、ちょっと遠い白河とか会津からのほうが、知り合いに会わないから来やすいとか。

実際、メンバーとして活動に参加してくれるけれども、「この活動をしていることを知られたら、何で参加しているのと勘繰られるのが怖い」というメンバーもいるんですよ。でも「うちの団体はアライがメインの団体だから、別にそのときは、私はアライとして応援しているんだよって言えばいいのよ」と伝えると、「ああ、そうか」となるのですが、やはり当事者の方は、自身のことを知られる不安を抱えていて、そうした想いを払拭するのは難しいなと思います。

◆震災や原発事故との関係

知り合いの記者さんから、「福島である以上、震災と絡めないと記事が書けないときがある」って話を聞いたことがあるんです。そのときに思ったのは、前川さんもよくおっしゃいますけど、震災で福島と福島以外という分断ができたり、福島の中でも原発立地自治体とそうでないところの分断が生まれたりというのは、やはり感じますよね。

その根底にあるものって、セクシュアリティの問題でも同じかなと思っています。相手の立場や価値観などを否定するのではなく、認めることでつながることができるはずです。「私たちは、原子力災害で謂れない差別を受け、嫌な思いをしたのだから想像できるでしょう？他の差別をセクシュアリティに当てはめればいいのです。震災を経験した福島だからこそ、あらゆる意味での差別をしない街になったらいいのに！」というふうに思います。

5. 幅広い活動

◆法務 de ランチ

「法務 de ランチ」は 2014 年から私が主宰している自主勉強会です。法律的なことの基本を分かっていないと、市民の方に必要な情報を提供できないですよ。公務員で個別法についてはすごく詳しいのに、公平原則や平等原則を知らないとか、そういう方もいっぱいいるので、基本的なことを知らない、やっちはいけないことがやっていいことに思えてしまったりすることがあるので、学ぶ場を設けてみようと思ったのが始まりです。私は基本的に、とてもお節的な性格なのですよね（笑）。それで、毎月 1 回、談話室でお昼休みにお弁当持

ち寄って、ちょっと法務を学ぶ勉強会をやっていて、もう 5 年になります。

法務部門に配属された際に、法務研修の担当になったのですが、女性職員から、「研修に行きたくても窓口業務だからいけない」という声がありました。まだまだ女性は、市民課とか福祉とか窓口職場に配置されることが多くて、一方、男性は華々しい商工振興や企画部門に配属され、全国を飛び歩くという格差を感じます。

それで、勤務時間外に自主的に学べる場ならみんなが参加できるかなと思いました。

夜の自主勉強会は沢山あるのですが、参加している人の多くは男性で、その陰には、仕事帰りにスーパーでお買い物して、学校、保育園にお迎えに行き、お家に帰ってご飯を作ってくれる配偶者の存在があるからです。

そんなわけで、お昼休みなら性別や家庭環境にかかわらず自由に参加できるかなと始めました。参加者は多いと 20 人超、少ないときは 10 人くらいで、男性もいますが、女性が 6 割くらいです。

テーマとしては、去年からずっと憲法を学んでいましたが、今年は民法改正を学んでいます。始めて 4 年目ぐらいに、私のような素人が憲法を教えるより、弁護士さんに教えてもらえたらいいなと思って、地元の法律事務所に飛び込みで行って、弁護士さんに「無償で協力してください」って無茶なお願いをしまして、今はボランティアで来てもらっています。

◆活動の下地となる経験

「法務 de ランチ」をやる前に、「こおりやま女性ネットワーク *Hana の会」という会に誘われて入りました。当時娘が高校 1 年生で、先輩から「子離れしておいたほうがいいよ」みたいなことを言われて、親が子離れしないと親離れできないから、家庭以外のところに 1 回参加してみようと入会したら、当時は飲み会しかやっていなかったのです。それが私にとっては詰まらなくて……。せっかく家族との時間を割いて参加するのに、飲むだけでは勿体ないなと思いました。そこで、「やるんだったら勉強会やりましょうよ」と提案して、学ぶ場を企画したのです。今思うと、そこで活動の基本的なことを経験していたのかもしれないね。

市役所に入る前に民間企業にいて、広告代理店みたいな感じの仕事で、イベント企画とかもやっていたので。多分、そうしたことの積み重ねで、「ダイバーシティこおりやま」などの活動も、あまり躊躇なくできたかなと思います。

◆雑誌連載での発信

この「法務 de ランチ」の活動で去年、第 13 回マニフェスト大賞の優秀コミュニケーション戦略賞というのをいただきました。早稲田大学マニフェスト研究会という団体が主体となって開催しているもので、自治体の長や職員、議員の方などのベストプラクティスを表彰して、それを全国に広げていくという取り組みです。

昨年の夏ぐらいに、とある方から「応募してみませんか」と声をかけていただいて、今思うと恥ずかしいお話で申し訳ないのですが、その賞自体を存じ上げなくて「もしかして応募数が足りなくて困っているのかな」と変な勘違いをいたしまして、応募することにしました。

ところが応募総数は全国で1,000件を超え、入賞者を新聞紙上で発表するくらいの賞で、とても驚いてしまいました。そして、私の「法務 de ランチ」の取り組みが、自治体職員の取り組みとして素晴らしいということで、表彰していただいたのです。

その受賞もあってか、今年（2019年）の4月から『月刊ガバナンス』（ぎょうせい）という雑誌の編集長の千葉茂明さんから声をかけていただき、「誰もが自分らしく生きることができる街へ」というタイトルで連載も始めさせていただいております。

郡山市でも多くの職場で購読しており、全国の公務員や議員の方の多くが読んでいる雑誌で、私のような無名の公務員でいいのだろうかと一晩悩みましたが、千葉編集長から、私のように仕事と関係のないところで地域に飛び出して活動する公務員は少ないとおっしゃってくださって、挑戦することにしました。

連載の初回は、ダイバーシティこおりやまの立上げ経緯をご紹介し、それ以降も性の多様性に関するテーマについても執筆しています。まだまだ日本では、セクシュアリティに関して閉鎖的な部分があるので。雑誌連載という新たな伝えるツールをきっかけに、風穴を開けられるようなことができたらいいなと思っています。記事を読んで、「こんなことがあるんだ」と思ってくれて、「うちはどうなの」って思ってくれる人が1人でも2人でもいたら、きっと変わるかなと思うのです。連載については、市役所内でも「楽しみにしています」と言ってくれる人がいっぱいいて、遠くの自治体職員の方からもメールをいただくことも増えてきました。

◆昇進について

私、今までは「あまり昇進したくない」という思いがありました。どうしても大きな組織では、昇進して上の役職になればなるほど、自分の思いと違うことをしなければいけなくなってしまうという姿を見てきたので、私が私らしくあるためには、「それは、違います」と言える立場にいたいという思いがあったのです。けれど、パワハラ申立と望まない人事異動に至る経験から、立場が上の人に社会は有利にできていて、弱い立場にあるといくら正しくても理不尽な目にあってしまうのだと思うようになりました。また、メンタル不全になってしまう後輩職員などを見ると、かばってあげるだけの力が自分に欲しいなと思うこともあります。ですから、積極的には望まないけれど、遅れ遅れぐらいで上がっていくとちょうどいいのかなと考えています。嫉妬の対象となるのも面倒なので、周囲より少し遅いぐらいがいいですね。今はむしろ遅すぎるくらいですが（笑）。

私は「道端のタンポポでいたい」と若い頃からずっと言っています。バラ園で咲いているバラとかではなくて、道端にひっそりだけ咲いていて、よく見たらキレイに咲いているみたいなの、そういう存在でいたいとずっと昔から思っていたのです。でも今は、道端に咲いている向日葵みたいになってしまっているので（笑）、自分が目指している方向とは少し違ってきているかなという思いもあります。

6. 成果と今後

◆活動の成果

手応えとしては、私自身が近くに現れてくれると思っていなかった性的マイノリティ当事者の方とのつながりが、本当に増えました。それも、文字だけのやりとりだった人が会いたいといってくれて会えるようになったりすると、信頼関係ができたのだなと嬉しくなります。当事者の方にとって、顔を出して直接会うって、すごく勇気があることだと思うので、本当に小さいことで、社会全体を変えるまではいかないけど、表に出て来られるきっかけになったりできているという意味では、一人ひとりが変わるきっかけぐらいは作れたのかなと思っています。

◆目標は「団体がいらなくなること」

私、大きな目標がないのです。新聞社さんのインタビューを受けたときにも、「目標は何ですか？」と聞かれたのですが、ハッキリしたものがなくて答えに困ってしまいました。

大きな目標としては、みんなが自分らしく自由に生き生きと伸び伸びと暮らせる街になったらいいな、社会になったらいいなという目標はあるのですが、自分がこうなりたいというのが全然ないのです。年をとったら、暖かい南の島で青い海をみながら、のんびり暮らせたらいいなという夢はありますが、目標ではありません（笑）。

ちなみに「ダイバーシティこおりやまの目標は？」と聞かれて答えるのは、「要らなくなること」です。私が活動しなくても、みんなが多様性を尊重し、伸びやかに暮らせる街になって、「ダイバーシティこおりやま」の必要性がなくなったらいいかなというふうに思っています。

◆家族の中で

娘が活動に大賛成してくれていて、嬉しいことに自慢の母だと言ってくれています。土日のイベントなどはタイミングが合えば手伝ってくれます。先日の上映会（2019年5月4日・ダイバーシティ映画上映会「私はワタシ～over the rainbow～」無料上映会・トークセッション）でも、メンバー全員が機械音痴だったのですが、娘が音響や照明など上映に関する技術的なことを全部やってくれて、大活躍してくれました。

「ダイバーシティこおりやま」は、家族には「こういう活動を始めるよ」というのを簡単に言って始めたのですが、私も家族も、こんなにいろいろな活動をするとは思っていませんでした。活動して1年ぐらい経ったとき、夫に「ママも性的マイノリティなの？」と聞かれたことがありました。驚きましたが、「私はそうではないけれど、でも自分がそうではなくても、それで困っている人がいると思うから活動しているだけだよ」と言ったら、「ふうん」という感じでした。

夫も同じ公務員なので、私が目立っていることで迷惑を掛けているかもしれないから、それはごめんねと言っています。考え方は人それぞれなので、私も家庭の時間と活動の時間、仕事の時間をしっかり分けて、バランスを保つように心掛けています。

実は、青森に旅行した際、立ち寄った飲食店でレインボーフラッグやチラシが置いてあったのですが、私は家族の時間だからとあえて触れなかったのですが、夫が店主に「こういう活動しているんですか？」って口火を切ってくれて、私も話すことができたということがありました。夫も応援してくれているのだなど、とても嬉しくなりました。

日本は特に主導的性別役割思考などが強い傾向があるので、男性は自由に外で活動しても、女性は家庭を守ることが美德のように思う人も多いですからね。

まだまだ日本では、女性で私のように活動している人には、家族とのバランスに気を遣うという感じの人も多いのではないかなと思います。

そういうことも含めて、みんなが伸びやかに「自分らしく」いられるような、そんな街になるように、これからも無理のないペースで活動していきたいと思います。